

曹洞俳壇

選・村松五灰子

豆受けて横綱拝む老婆かな

静岡県 水口 淳

評 年を重ねるも良し。元気であることで人気力士の豆撒きにも出会え、豆を受ける。仏さまも横綱もありがたい。まこと感謝の合掌である。そんな老婆のユーモラスさも滲む姿を描いた。

春待つや失語の妻をつれ帰る

群馬県 山本 俊久

評 病む妻を愛しむところが「つれ帰る」である。多くを語らずとも読み手に響く一句である。

◆夕されの湖うみに鳩はとなすゑくぼかな 岩手県 鈴木 道昭

◆鏡割汁粉碗こしあじにおとつとき 東京都 鈴木 洋子

◆大寒と言ひて司会しゐを始めけり 岐阜県 金子 嘉幸

◆着ぶくれて医院いんえんの椅子いすの端はしにをり 兵庫県 内藤 昭子

◆ものの芽いばや入相いりあひの鐘かね七つ八つ 宮城県 須藤智恵子

◆幸せの固まりかたまりとなり日向ひなたほこ 高根県 藤江 堯

◆煮凝りに先づ手てを伸ばす父ちちなりき 広島県 小畑 宣之

◆庭にわに立ち独りひとり仰あがぎし屋根やねの月 静岡県 島田 イネ

◆冴返さへるその奥おくしんと典座てんざ寮せう 宮城県 鎌田登喜子

◆ルツコラは嫁よめの好物好物寒かの水 千葉県 甲斐 勇

*選者吟

樟落葉過去くすわらばとは踏ふんでゆくものと

五灰子

*作句小見

日々の過ぎ去るのは年齢と共に加速するような気がします。そんな中の今日という歴史の中に私たちは過あごしています。ともかく明日よりは今日のほうが若い、そう思うようになっています。少し元気が出るような気がします。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

山並のくつきりと晴れいきいきと溪水はし
る倒木の下
宮城県 鎌田登喜子

評 早春の風景がくきやかに描写されていて、春を迎える歓
びが自ずと伝わってくる。「山並」「倒木」の横の視野と「溪
水」へ向ける縦の視線の交叉に動きがあるのも面白い。

上る入るの京のまちより初旅の娘のメール
は糠雨ぬかあめという
兵庫県 前田あつ子

評 「上る」は北に行くのこと。「入る」は「西入る」「東入
る」などと使われる。碁盤の目のような街、京都の番地表記
の特色を生かし、初旅の若者が地図を片手に観光する様子を
活写する。「糠雨」を添えたことで更に旅情を醸している。

◆ ママの手からこの胸に赤ちゃんを抱くわたしは春のゆり
かごになる
山口県 横川美代子
◆ 托鉢によこれし足袋を洗ひつつ休む日の無き夫のおもは
る
島根県 門脇 順子

◆ 春立ちて栽培計画編んでいる農の夫の横顔若し
秋田県 小松 紀子

◆ 「ありがとう」「ごめん」は口に出して言う新婚時代の
約束どこへ
奈良県 鈴木 重雄

◆ 失業の長きにわたる苦しさ能耐える窓辺に雪は降りつつ
北海道 高橋 哲

◆ 特製の母が作りし温かきわら布団にて寝ねし日しのぶ
岩手県 池田 眸

◆ 大西目ぐらりと落ちて燃ゆること夕焼空のしばらく残る
東京都 長谷川 瞳

◆ 煮る焼くの匂ひ厨に満ちてをり御節準備は蒸気のあるつば
岐阜県 後藤 進

◆ 写経会のしじまを破る咳ひとつ放哉はなげなりや少し笑えり
青森県 中田 瑞穂

◆ 檀の香りが髪に背に肩にただよふ堂に幼と並ぶ
山梨県 北村 富子

*選者詠

わが撞つきし鐘の余韻が身にうつり鳴りやま
ぬなり初春はるのことぶれ
ちづ

*作歌小見

中田さんの一首に詠われている「放哉」は尾崎放哉のこと。
「咳をしてもひとり」など自由律俳句で知られています。小
豆島で寺男をして晩年を送ったそうので、「写経会」の背景が
うかがえます。結句はニヒルな「笑えり」かも知れません。



大本山永平寺



五月

永平寺では、五月一日から三時半振鈴（起床・写真右）となります。永平寺の起床時間は、春と秋（三〜四月・十〜十一月）が四時、冬（十二〜二月）が四時半、夏（五〜九月）は三時半です。「チリンチリンチリン……」と大きな鈴を勢いよく振りながら山内を駆け巡ります（振鈴の写真は九十二段の階段を一気に駆け上がります）。また一日は「新到掛搭式」の日です。二月十八日から三月にかけて新に上山した修行僧は、暫到と呼ばれ一時的に留まることを許されているだけでした。厳しい寒さとつらく苦しい試練を乗り越え、やっとこの日から永平寺の正式な修行僧と認められ新到と呼ばれます（新到掛搭式の写真・左上は決意を述べる新到）。六日の夕刻には「大夜参行茶・夏安居制中配役」が行われ、夏安居制中（禁足修行期間）のそれぞれの役割を請け、一人ひとりの名前が読み上げられ、お茶を頂く儀式です（大夜参行茶・夏安居制中配役の写真・左下は役を請けこれから行茶が始まる所）。翌七日からいよいよ九十日間の禁足修行の始まりです。さらに厳しく綿密な修行となりますが、皆が力を合わせ支え合いながら励んでゆきます。

人々自ら利なれども道を行ずる事は衆力を以てするが故に、今心をつつにして参究尋覓すべし（『正法眼蔵随聞記』）



大本山總持寺



夏安居げあんこ

總持寺では四月より夏安居に入っており、修行に専心して自己研鑽に励む日々が続いております。

夏安居はお釈迦さまのころよりの行事で「雨期の修行期間」を意味しました。この時季のインドでは雨期で草木が生い茂り昆虫などが活発に動き始めます。小動物や昆虫への無益な殺生を避けるため、外での修行（遊行）を止め一カ所（精舎）に留まり、坐禅を中心とした修行に励みました。

この夏安居がインドから中国、更には日本へと相承され、現在でも禅の修行道場では厳格に外出が禁じられているのです。

特に五月半ばには「五則」という行事が修され、自己反省の儀式ともいえる「大布薩式」や「法戦式」が厳かに行われます。

法戦式は全修行僧の先頭に立つ首座が、大勢の修行僧と禅問答を交わす儀式で、首座は自分の持てる力を全て出し切って氣迫漲る問答が交わされます。

五則が終わるころには、新しい修行僧たちも修行道場の一員として自身が馴染んできたのを身体で実感するのです。

その他、五月は鶴見大学附属高校の「学校授戒会」や鶴見大学新入生の研修会も總持寺を会場に行われます。